



肉体としての 絵画

——ドローイングに寄せて

母袋 俊也



仮に或る二つの事項を分けるものがあるとすれば、そこにあるのは境界だけではなく、自ずとその原理にも差異が認められうるだろうし、それぞれはその原理こそをアイデンティティとして立脚し、その特質を露にしていく事を課題としていると考えられる。

ではドローイング・素描とペインティング・絵画は一体如何なる関係を示しているのだろうか。

両者はそれぞれの展開の過程で互いに領域を往来し、そのフィールドは相互補完的に浸透し拡がりを見せ、その境界は以前にも増して判然とはしていない。そして今やその二項の差異の検証は意味を持ち得ないかの様にも見える。だが、あえてここではその現象ではなく、それぞれを規定し育んだ根本的とも言える原理を再考する事で、その両者の本質に触れる事が出来ると考えられるからである。ドローイング、ペインティングは共に、平面上をフィールドとする表現である。しかし、物質性を軸に考察しようとした時、それぞれは差異を明らかにし始める筈である。

ドローイングが、非物質性の特徴を示すのに対して、絵画はむしろ物質性をその成り立ちの重要な拠所としている様に思われる。絵画にとって物質性は、支持体としてのキャンバス、板と云った描かれる場としての表面のみならず、

その表面を支える木枠・板の厚み即ち構造や、絵具自体の物質としての自覚を促し、更に主題、思想を受け止めるボディ・肉体の所持の意識にも連鎖されていくのである。

一方ドローイングが物質性と結びつきづらいのは、おそらく支持体とされる事の多い紙の特性とも不可分と考えられるのだが、最も原初的な物質の一つとして永い歴史と共にあった紙は我々に物質としての認識を時に忘れさせてしまうのだろうか。又色彩的にも極めてニュートラルで、ちょうど空気や光がそうである様に無への連想をも許すのである。更に鉛筆、コンテ、水彩等描画材料も又物質感に乏しい傾向が認められる。さてこれらが誘発するところの非物質性は、ドローイングに一体如何なる原理的意味を与えてきたのだろうか。

物質、言い換えれば肉体そのものが絵画であるのに対し、ドローイングは肉体を持たないと云う一見ネガティブな図式を背負わされているのだが、むしろそれは、主題即ち概念そのものを宙つりにし鮮明に際立たせる特徴を引き出すのである。それはセザンヌの水彩と油彩の関係が示す様に、時に本制作よりドローイングの方がより確に作者の意図・意志が明示されると云う事例をつくり出す結果ともなるのである。又デュシャンやボイスら概念的作家にとってドローイング作品がことさら重要な意味を持つている例からも明かとなる。

ではここで、ドローイング・素描の画面上の原理に立ち返る事にしよう。

本来素描とは、何にも増して形即ち空間に強く結びつくものであると私は考えている。それは白と黒の間にある無限なグレーの階調、又は線描によって、平面上に或る特定な空間を実現させようとする運動なのである。

故に水墨画もその類型の一つと考えられるのだが、墨の提供する無限に近い濃淡のヴァリエーション、運動感を率直に伝える筆致は空間表現に一つの解答を示した訳だが、もともと宗教性に紀元のある漫画の系譜では、牧谿の画面上で満たされ

